



中日両言語における「兎」使用の比較 : 使用頻度・ 比喩・ことわざの観点から

張, 晶鑫
陶, 怡楽

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 465:23-33

(Issue Date)

2023-03-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100479379>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479379>



中日両言語における「兎」使用の比較

—使用頻度・比喻・ことわざの観点から—

張 晶鑫(湖北大学)

zjx-kobe@hotmail.com

陶 怡楽(湖北大学)

2281402687@qq.com

Comparison of Usage of *Rabbit* in Chinese and Japanese Languages

—In terms of Frequency, Metaphor, and Proverb—

ZHANG, Jingxin (Hubei University)

TAO, Yile(Hubei University)

概要

本研究は、中日両国における「兎」の言語使用の違いを、コーパスを用いて調査した。まず、全体の使用頻度について、中国語より日本語では「兎」がより頻繁に使用されることがわかった。次に、「兎」の意味用法を 1) 一般用法、2) 比喻用法、3) ことわざ用法の 3 つに分けて分析を行ったところ、一般用法に関しては、中国語では一般的に食材や実験材料として扱い、日本語ではペットとして扱うこと、比喻用法に関しては、中日は共に複数の意味が使われているが、中日間で具体的な意味分類が異なり、頻度面でも差があること、ことわざ用法に関しては、タイプ数においても、トークン数においても、中国語における「兎」ことわざが日本語より多いこと、中国語の「兎」ことわざはより全体のイメージから連想する人格に注目し、日本語の「兎」ことわざはより体の部位から連想する性格に注目すること、などが明らかになった。

キーワード

「兎」、比喻、コーパス、ことわざ

1. はじめに

比喻は特定の文化が生み出した認知活動である。動物にまつわる比喻は、人間の認知において特に重要な位置を占めており、そのプロセスを明らかにすることは、その背景にある文化を理解する手がかりとなりうる。特に動物をめぐって数多くのことわざや熟語が作られ、そこからたくさんの比喻現象が見られる。例えば以下の例を見てみよう。

(1) ナツキのウサギのような耳が、一瞬びくりと動いたのを、ぼくは見逃さなかった。

(BCCWJ_書籍_OB1X_00097)

(2) 兔崽子

例文(1)における「ウサギのような耳」は中国語に直訳すると「像兔子一样的耳朵」となり、耳の形に言及しているが、中国人読者には場合によって「像兔子的耳朵一样灵(ウサギの耳のようによく聞こえる)」と理解される恐れもある。例文(2)は白水社の『中国語辞典』によると、もともとは「目下の人や子供を見下げて言う場合」の子供の俗称で、罵り語の 1 つであるが、日本語に直訳すると「兎の子」となり、かえって可愛いイメージに理解されてしまう恐れもある。このように、中日両言語における「兎」は必ずしも同じではないことがわかる。

本研究は中国でも日本でも馴染み深い「兎」を例として、中日両国において動物に込められた思いや動物に対するイメージの異同を検討し、比較を行う。中日両言語における「兎」の使用に関して言えば、その違いは必ずしも明らかにされていないようである。例えば、馬場(2012)は「ことわざに描かれた兎の特徴に関しては、言語文化による大きな違いはさほどないようである」と述べている。実際、中日両言語において、「兎」は同程度に使用されているのか、完全に同じ意味で使用されているのか、特に、「兎」に対するイメージに違いはないのかを調査する必要がある。本研究は大規模なコーパスデータを根拠に、使用頻度・比喩・ことわざの 3 つの観点から検証を行なう。

2. 先行研究

2.1 中国における先行研究

中国では「兎」を研究対象にした研究は多くなかったが、以下の 3 つの研究が代表的である。

秦(2016)は、十二支に関する慣用句を、1)褒め言葉、2)貶める意味に使う言葉、3)イメージが中立しているか否かという基準に基づいて分類を行い、その中に含まれる動物のメタファー認知活動について考察を行った。その結果、中国人の「兎」に対する認識は、清潔感があり、かわいくて機敏であることや臆病で逃げるのが得意であることなどがあげられている。そして、中国人は常に「兎」をチャンスやタイミングのメタファーとして表現することが多いとしている。

陳(2018)は概念メタファー理論を用いて、英語と中国語における「兎」の概念メタファーの共通点と相違点および、その生成メカニズムを検討した。その結果、英語と中国語における「兎」に関するメタファーの共通点は、基本的に起点領域の習慣、本能、形、他のものとの関係に基づいて写像を行うということにあるということが明らかになった。また、相違点としては政治体制、文化史、地理的位置、社会環境、習慣などの影響により、「兎」に表現されるメタファーは国によって異なるということも示された。

銭・毛(2022)は中国語と英語における「兎」にまつわる慣用句の比較研究を行った。その結果、中国語や英語は共に「兎」の行動や性格に関する特徴を強調することが明らかになったが、外見的特徴に注目するのは中国語のみで、英語には関連する表現が存在しないことがわかった。

2.2 日本における先行研究

日本においても「兎」を研究対象にした研究は多くなく、主としてことわざに含まれる「兎」に対するイメージやそこに含まれるメタファー表現を中心に展開している。

馬場(2012)は、日本の「兎」に関することわざを、「兎」の全体的特徴に注目したものと体の部位の特徴に注目したものという 2 つに分け、日本人の「兎」に対するイメージを分析している。その結果、「兎」は全体として、常に狩猟の対象と見なされること、性格としてはおとなしく、臆病で無能で無責任感などの特徴があることが明らかになった。また、「兎」の体の部位に見られるメタファーとしては、例えば、「兎」の耳は一度に二方向から音を聞くことができてよく利くことから「人の知らない事件や噂などを聞き出してくる」とのメタファーとされている。

王・浮田(2012)は、中日両国の「兎」に関することわざの起源に基づいて分類を行い、「兎」のイメージとその中に含まれるメタファー表現から、中国と日本の「兎」に対する発想の相違点を比較した。その結果、相違点としては、1)日本のことわざには兎の体の部位に関するものが多く、中国のことわざよりも分類が細くなされていること、2)日本のことわざは、「兎の子の生まれっぱなし」のように「兎」の「子育て」に注目し、人の無責任感を指しているものがあるのに対し、中国のことわざは「兎」の「巣」に言及することが特徴的で、中国人の「家」に対するイメージが反映されること、3)日本のことわざは兎の敏捷性に注目しているが、中国のことわざは兎の動きが人の落ち着かない様子を表現していること、などが挙げられている。

上述の先行研究は、「兎」に関する言語使用の中日比較や中英比較を行った重要な文献であり、文化間の違いを明らかにしている。しかし、それらの研究には課題も残されている。第一に、全体として「兎」に関する先行研究の数は少なく、中日間での共通点と相違点については十分に研究されていない。第二に、中日言語間の比較においてはイメージの違いに注目しているものが多く、言語認知に関する言及は少ない。実際、中日共に「兎」は様々な意味で使われ、その意味用法が必ずしも同じではない。さらに、自然界における動物の 1 種として使われる用法もあれば、比喻やことわざに使われる用法もある。したがって、これらを一枚岩に全体のイメージではなく、意味用法を詳しく区別した上で、「兎」に対する概念認知の違いを調査する必要がある。第三に、多くの研究は、意味論レベルでことわざを分類や比較しているだけで、実際の言語使用状況は考慮されていない。実際の使用状況に注目することで、「兎」が使われる典型的な用法は何かを見ることができ、そこから得られる知見はより忠実に言語実態を反映することでできると思われる。本研究は、コーパスデータを根拠に、中国語と日本語における「兎」の用法を比較し、中日両言語における共通点と相違点を探ることとする。

3. リサーチデザインと手法

3.1 目的と研究設問

本研究は、中日両国において「兎」に関する用法は何かどのように違いがあるのかという疑問に応えるために、中国語と日本語における「兎」の意味用法を調べ、動物をめぐる比喻やことわざの背後にある異なる文化的背景を比較し、中日文化の相互理解の深化を試みるものである。

上記の目的を踏まえて、本研究は具体的に以下の 2 つの研究設問 (RQ) を設定する。

RQ1: 中国語と日本語においては、「兎」はそれぞれの程度使われているか。

RQ2: 中国語と日本語においては、「兎」の用法はそれぞれどのように異なっているか。

3.2 データ

本研究で利用するデータは 4 つある。1 つ目は、中国語のデータベースとして、北京大学中国語言語研究センターが開発した『CCL コーパス』を使用する。このコーパスは、約 7 億文字の言語データを集録しており、現在広く使われている中国語コーパスの 1 つである。2 つ目は、日本語のデータベースとして、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を使用する。BCCWJ は、現代日本語の代表として 1 億語の言語データを集録しており、現在唯一の日本語均衡コーパスである。3 つ目は、日本語ことわざデータベースとして、『故事・俗信ことわざ大辞典』(尚学図書編集、1981) を資料とし、「兎」に関することわざを抽出することとする。4 つ目は、中国語のことわざデータベースとして、温端政氏などが編集した『中国諺語大全』(2004) と『現代中国語大辞典』(2021) を資料とし、「兎」に関することわざを抽出することとする。

3.3 手法

RQ1 については、中国語と日本語における「兎」の使用頻度をそれぞれ CCL コーパスと BCCWJ を用いて、検索して取得する。前者は現代中国語に限定し、後者は語彙素読みで「ウサギ」をキーとして検索を行う。ただし、「月野兎」などの固有名や会社名など、本研究の目的と直接関係がないものは手作業で除外することとした。また、使用頻度の差異を比較するため、カイ二乗検定を行う。

RQ2 については、中国語と日本語における「兎」に関する用法を、1) 一般用法、2) 比喩用法、3) ことわざ用法の 3 つに分けて集計し、さらに、上述の秦 (2016) に倣い、ポジティブなもの、ネガティブなもの、ニュートラルなものに分けて集計する。また、使用頻度の差異を比較するため、カイ二乗検定を行う。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 「兎」の使用頻度

それぞれのコーパスにおける「兎」の使用頻度を調査した結果、BCCWJ においては「兎」の使用頻度は 1012 回で、CCL における「兎」の使用頻度は 2613 回であった。ここで注意すべきは BCCWJ と CCL の元々のコーパスサイズが異なるため、比較をするためには調整が必要であるということである。ただし、BCCWJ にはコーパスサイズは語数で示されており、CCL にはコーパスサイズが文字数で記録されている。ここでは青空文庫に新着の『独居雑感』(永井荷風) をサンプルとして語数と文字数の比率を計算することとする。その結果、2817 語は 4249 文字数に当たることがわかった。この比率で援用して BCCWJ の総文字数を計算し、2 つのコーパスにおける 100 万文字あたりの使用頻度はそれぞれ BCCWJ では 6.40 回で、CCL では 4.50 回であった。カイ二乗検定を行

い、日本語における「兎」の使用頻度は有意に多かったことが示された ($\chi^2(1)=3484.622$, $p<.01$, $\Phi = 0.002$)。すなわち、一見中日両国において同じく馴染み深い「兎」は、日本語言語生活においてより多く使われていることが示された。これもまた、日本語における「兎」の意味概念や文化含意を調査する必要性を語っている。

4.2 RQ2 「兎」の意味用法

RQ1 では両言語における「兎」の使用頻度に注目した。RQ2 では、意味用法に注目した場合、中日両言語における「兎」には違いがあるのかを調査する。以下では、1) 一般用法、2) 比喩用法、3) ことわざ用法の 3 つに分けて分析する。分類の基準について、一般用法は、「兎」本来の意味として使われる用法で、比喩用法は「～みたいに」「～のように」などの用法を指し、ことわざ用法は昔からある言い回しを指す。なお、一部のことわざには比喩表現も含まれるが、本研究はそれらを比喩表現と認定せず、依然としてことわざとみなす。また、ことわざの認定はすでに述べた『故事・俗信ことわざ大辞典』(尚学図書編集、1981) や『中国諺語大全』(2004) と『現代中国語大辞典』(2021) を参考に行った。

「兎」の意味として本研究では 3 つの意味を認めた上で分類した結果、表 1 と表 2、表 3 が得られた。まず、一般用法として使われる「兎」の結果を見てみよう。

表 1

「兎」の一般用法

言語	分類	用例	トークン	割合
中国語	自然界における兎	那鷹能抓地上的小动物，像 <u>兔子</u> 、蟒蛇之类，多吃活食。（著者訳： <u>ウサギ</u> やボアコンストラクターなど地上の小動物を捕らえ、主に生き餌を食べる鷹。）	749	43.37
	食材、実験材料	此实验观察 <u>兔</u> 注射胰岛素和肾上腺素前后的血糖浓度变化。（著者訳：この実験は、 <u>ウサギ</u> にインスリンとエピネフリンを注射する前後での血糖値の変化を観察するものです。）	945	54.72
	ペット	摆放着几种学校为学生豢养的小宠物。比如小老鼠、小野猪、 <u>小兔子</u> 、小乌龟和各种昆虫等等。（著者訳：学校では、生徒のためにいくつかの小さなペットを飼っています。例えば、ネズミ、イノシシ、 <u>ウサギ</u> 、カメ、様々な昆虫などです。）	33	1.91

	自然界における兎	たまに <u>兎</u> も撃つことがあった。#それらの肉が食卓に上ることもある。	451	60.78
日本語	食材、実験材料	関西女子短期大学教授の永井勝次博士が行っています。一つは <u>ウサギ</u> にアルコールを与えた実験です。	159	21.43
	ペット	<u>ウサギ</u> に素敵なファッションを着せる飼い主が腕を振るいました。	132	17.79

表1における「兎」の一般用法とは動物の1種としての「兎」の本来の意味を指す。「兎」の特徴や生態・習性などはすでに決まったものであるため、我々の直感から見れば、一般用法に関しては中日間の違いはそれほど大きくないはずだと思われる。しかし、上記の結果を踏まえてみれば、実際の言語生活においては中日間で「兎」に対する捉え方が完全に同じではないことが表1より示された。中日は共に「兎」を狩猟の対象として扱うことに共通しているが、食材であるかやペットであるかについては大きな違いが見られた。中国においては「兎」が食材や実験材料などだと考えている人が多いのに対して、日本ではペットだと思う人が少なくないようである。この違いは言語によるものよりは、言語を使う主体の生活習慣や文化背景が異なることによるものと思われる。

次に、「兎」の比喩用法に注目して分析したところ、表2の結果を得た。

表2

「兎」の比喩用法

言語	分類	意味	タイプ	トーン	割合
中国語	ポジティブ	足が速い（例：我们必须比兔子跑得快。）	68	122	13.77
	ネガティブ	順良（例：祝你在猴年，比鼠强，比牛牛，比虎猛，比兔乖，比龙尊……）	31		
	ニュートラル	よく聞こえる（例：这个人的耳朵简直比兔子还要灵呢。）	23		
	ネガティブ	自然イメージ（例：两个武卫队员像鹰抓兔子一样把人从地里揪出来。）	57	421	47.52
英語	ポジティブ	月（例：兔子是月亮的使者。）	19		
	ネガティブ	属相（例：她属兔，所以大家叫她兔子。）	5		
	ニュートラル	そのほか（例：像兔子一样蹦来蹦去。）	340		
英語	ネガティブ	ずるい（例：人头济济，正在集中心神捕捉那狡兔似的命运。）	91	323	36.46

テ イ ブ	性欲強い（例：你这个兔子，找你的母猫叫春去吧！）	10		
	臆病（例：吓得像只兔子似的。）	44		
	弱小（例：像捏死一只兔子一样把她捏死。）	14		
	子供の俗称（「兎」の子）（例：兔崽子）	125		
	自惚れ（例：龟兔赛跑）	38		
	噂好き（例：一听见有人在说那件事，他立刻竖起兔子耳朵去听。）	1		
		20	20	2.26
その他	キャラクター（例：龟兔赛跑中的兔子）			
日 本 語	ポ 足が速い（例：兎のように駆けました。）	3	36	13.33
	ジ 順良（例：兎には、やさしい気持ちを持っているとみえ	2		
	テ る。）			
	イ よく聞こえる（例：「兎」マーク）	23		
	ブ 機敏（例：兎の象徴する機敏さで、より人脈も拡大。）	1		
	無邪気（例：あどけない無邪気な声は兎みたいだと思っ	1		
	た。）			
	可愛い（例：ナツキの兎のような耳が、一瞬ぴくりと動	6		
	いたのを、ぼくは見逃さなかった。）			
ニ ユ ー ト ラ ル	自然イメージ（例：兎の鼻の事）	52	83	30.74
	月（例：月には兎。）	28		
		3		
	属相（例：卯年生まれだから「兎」と呼んでるんだ。）			
ネ ガ テ イ ブ	ずるい（例：狡兎三窟）	48	63	23.33
	臆病（例：怯えきった小さな兎を思い出した。）	7		
	詐欺師（例：騙しおおせて渡り切ろうとすると兎の嘘が	4		
	わかってしまい、皮をはがれて海の塩で苦しむという			
	民話。）			
	「兎」のクソ（例：兎の糞）	3		
	自惚れ（例：兎の油断による昼寝。）	1		
その他	キャラクター（例：兎と亀の昔話）	88	88	32.59

『日本大百科全書』によれば、「比喩」とは、いいたい事柄を何かに例えることによって、効果を期待する表現方法である。『デジタル大辞泉』によれば、「比喩」とは、ある物事を、類似または関係する他の物事を借りて表現することである。上記の 2 つの定義によれば、比喩は、すなわち事のある側面をより具体的なイメージを喚起する言葉で置き換え、表現効果を高めるレトリックの 1 つである。言い換えれば、人間の物事に対する捉え方、認知の仕方をよく反映していると言える。

表 2 に注目すれば、わかることは 3 点にまとめられる。

1 点目は、中日両言語は共に 15 種の意味分類が行われ、すべて「ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ」の 3 種に分けられるということである。また、割合に注目すれば、中日両言語共に「ニュートラル」な用法が最も多いことが示された。このことは中日間で一定程度の共通点を持つことを示唆している。また、注目すべきは、中日両言語は共に「兎」に対して多くの意味を付与していることと、中日両言語は共に「兎」の異なる側面や具体的な特徴に注目し、細かな意味ニュアンスを表現しているということである。これもまた「兎」を例として中日比較を行うことの妥当性と必要性を示している。

2 点目は、中日間で具体的な意味分類が異なるということである。例えば、ポジティブにおいて、日本語に見られた「無邪気(例:あどけない無邪気な声は兎みたいだと思った。)」や「可愛い(例:サロメはお尻を押さえて兎みたいにぴよこんぴよこん跳ね回る。)」といった意味用法は中国語には見当たらなかった。また、ネガティブにおいては「子供の俗称(例: 兔崽子)」という用法は日本語に見当たらなかった。このことは、「兎」に対する捉え方や「兎」に注目する観点が中日間で大きく異なることを示唆している。これもまた「兎」を例として中日比較の必要性を示しており、同時に中日比較の難しさを示している。

3 点目は、中日間で多用する意味分類が異なるということである。例えば、日本語においてはニュートラルな意味で使われる割合が 30.74%で、中国語においてはニュートラルが 47.52%にも及ぶ。カイ二乗検定を行った結果、日本語に比べて中国語の方はニュートラルな意味がより多く使われることがわかった($\chi^2 = 29.179$, $p < .01$, $\Phi = 0.084$)。また、日本語に比べて中国語の方はネガティブな意味がより多く使われることも示された($\chi^2 = 23.324$, $p < .01$, $\Phi = 0.076$)。ただし、ポジティブについては有意な差が認められなかった($\chi^2 = 1.743$, ns , $\Phi = 0.021$)。そして、特定のキャラクターと結びつく方面に関しては、中国語に比べて、日本語の方がその結びつきがより強かった($\chi^2 = 142.210$, $p < .01$, $\Phi = 0.195$)。以上の結果をまとめれば、一般的に中日両言語は共に「兎」を中立の立場から捉え、ポジティブな意味においては大きな違いは存在しなかった。しかし、日本に比べ、中国はよりネガティブな意味に目を向け、日本は中国に比べて物語などに出現する特定のキャラクターを連想する傾向が強いことが示された。

最後に、ことわざ用法を分類した結果が以下の表 3 である。

表 3

「兎」のことわざ用法

言語	分類	タイプ	合計	割合	トークン	合計	割合
中国語	ポジティブ	足が速い(例: 势若脱兔)	15	16	16.67	68	13.01
		順良(例: 兔子急了还咬人)	1			11	
	ニュートラル	月(例: 兔走乌飞)	13	52	54.17	19	45.80
		その他(例: 守株待兔)	39			278	
	ネガティブ	ずるい(例: 狡兔三窟)	14	28	29.17	91	40.86
		性欲強い(例: 兔儿爷)	1			10	
		臆病(例: 鸡肠兔胆)	2			8	
		弱小(例: 狮子搏兔)	8			14	
		子供の俗称(例: 兔崽子)	1			125	
		凶悪(例: 兔头獐脑)	2			0	
日本語	ポジティブ	足が速い(例: 処女脱兎)	5	9	14.52	1	3.08
		順良(例: 兎も七日なぶれば 噛みつく)	2			1	
		よく聞こえる(例: 鳶目兎耳)	1			0	
		後ろ足が強い(例: 兎の上り 坂)	1			0	
	ニュートラル	自然イメージ(例: 鹿を逐う物 は兎を顧みず)	23	35	56.45	13	84.62
		月(例: 金蟾玉兎)	8			24	
		「兎」の毛(白い)(例: 寒の兎 か白鷺か)	3			0	
		「兎」の体型(小さい)	1			18	
	ネガティブ	ずるい(例: 狡兎三窟)	4	18	29.03	0	12.31
		臆病(例: 貂になり兎になり)	1			0	
		弱小(例: 獅子は兎を撃つに 全力を用う)	6			0	
		詐欺師(例: 貂なき山に兎誇る)	2			4	
		「兎」のクソ(例: 兎の糞)	2			3	

自惚れ(例: 兎の昼寝)	1	1
噂好き(例: 兎の耳)	1	0
無責任(例: 兎の子の生まれ っぱなし)	1	0

『日本大百科全書』によれば、「ことわざ」とは、古くから言い慣わされ、日常生活の真理をうがった簡潔な表現であり、主として庶民生活の体験的な知恵から生み出されたものが多いが、古典に含まれた格言や故事などから出て、いつのまにか俗間に流布したものも含まれる。『デジタル大辞泉』によれば、「ことわざ」とは、古くから言い伝えられてきた、教訓または風刺の意味を含んだ短い言葉で、生活体験からきた社会常識を示すものが多い。2 つの辞典は共に「生活体験」を取り上げており、すなわち、ことわざを分析することでその言語を使う人々の生活や考え方や物事の見方を知ることができると思われる。

表 3 に注目すれば、わかることは 3 点にまとめられる。

1 点目は、タイプ数に注目すれば、中国語においてはことわざに使われた「兎」表現の種類数が日本語より豊富であるということである。中国語においては 96 種の「兎」ことわざが確認され、日本語においては 62 種確認された。このうち、割合から見れば、中日両言語は共に、ニュートラルなもの > ネガティブなもの > ポジティブなものという順番であった。この順番は、「兎」という動物を客観的に見る傾向と「兎」の特徴を借りて人々への教訓を発信する傾向を示す中日間の共通点を示している。

2 点目は、トークン数に注目すれば、中国語においてはことわざに使われた「兎」の使用頻度が日本語より高いということである。カイ二乗検定を行ったところ、ポジティブでは ($\chi^2 = 24.552$, $p < .01$, $\Phi = 0.081$)、ニュートラル ($\chi^2 = 19.557$, $p < .01$, $\Phi = 0.070$)、ネガティブ ($\chi^2 = 74.584$, $p < .01$, $\Phi = 0.139$) という結果を得た。

3 点目は、中日間で意味分類が異なるということである。まず、ポジティブについては、「よく聞こえる(例: 鳶目兎耳)」「後ろ足が強い(例: 兎の上り坂)」などの用法は中国には見られず、日本語独特の意味であると考えられる。また、ネガティブについては、「子供の俗称(例: 兎崽子)」や「凶悪(例: 兎頭獐脑)」などの意味は中国語にのみ使われ、「詐欺師(例: 貂なき山に兎誇る)」「兎」のクソ(例: 兎の糞)」「自惚れ(例: 兎の昼寝)」「噂好き(例: 兎の耳)」「無責任(例: 兎の子の生まれっぱなし)」などの意味は日本語にのみ使われている。銭・毛(2022)では、中国語や英語は共に「兎」の行動や性格に関する特徴を強調すると述べられているが、本研究の結果から見れば、中国語のことわざを使う「兎」はより全体のイメージから連想する人格の方に注意が向き、日本語のことわざを使う「兎」はより体の部位から連想する性格の方に注意が向くところに違いが見られた。

5. まとめ

本研究の目的は、中日両国における「兎」の使用の違いを、コーパスを用いて調査してきた。まず、全体の使用頻度について、日本語ではより頻繁に「兎」を使用し、中日間で違いが見られた。

次に、「兎」の意味用法を 1) 一般用法、2) 比喩用法、3) ことわざ用法の 3 つに分けて分析を行った。一般用法に関しては、中国語では一般的に食材や実験材料として扱い、日本語ではペットとして扱うところに違いがあった。比喩用法に関しては、中日は共に複数の意味が使われているが、中日間で具体的な意味分類が異なり、頻度面でも差があることがわかった。ことわざ用法に関しては、タイプ数においても、トークン数においても、中国語における「兎」ことわざが日本語より多いことが示唆され、中国語の「兎」ことわざはより全体のイメージから連想する人格に注目し、日本語の「兎」ことわざはより体の部位から連想する性格に注目する傾向があるということがわかった。

しかしながら、本研究にはまだいくつかの課題がある。まず、コーパスにおける「兎」の意味分類は、著者たちの主観的な判断に基づいたものであるため、異なる見解が存在する可能性もある。また、物語に出現する「兎」に関しては今回は対象外としたが、これらにも研究する余地が残されている。そして、より精緻化した知見を得るため、兎のみならず、他の動物に関する中日比較を研究する必要がある。今後はこれらの課題を踏まえ、さらに研究を進めていきたいと考えている。

引用文献

- 钱科宇&毛智慧(2022). 汉英隐喻性“兔”动物习语的认知突显. 汉字文化, 14,155-157.
- 陈伟玲(2021). 概念隐喻理论视角下的英汉“兔”对比分析. 新纪实, 13, 94-96.
- 秦乔迁(2016). 汉语十二生肖惯用语研究. 福建师范大学博士论文.
- 王雪,浮田三郎(2012). 「兎」にまつわる日中諺の対照比較考察. 広島大学国際センター紀要, 2, 61-68.
- 馬場俊成(2012). 「兎」に関することわざ:兎をどう捉えてきたか. 札幌国語研究, 17. 1-8.